



常設「リサイクル広場まちだ」がスタート

昨年2007年の6月23日から8月19日まで、ごみゼロ市民会議の実験のひとつとしておこなわれ、今年の1月19日から3月29日まで行政と市民有志との協働による「試行」実験が続けられてきました「リサイクル広場まちだ」。これまでの経験やノウハウをもとにして、いよいよ7月24日(木)から常設の広場がオープンしました。



開場日と時間、持ち込めるものは？

今回のこの常設「リサイクル広場まちだ」は、リサイクル文化センターに隣接する旧剪定枝資源化センターを改装してオープンしました。土木サービスセンターの裏側にあり、通りからすこし見えにくい場所にあります。オープン時には通りに広場ののぼり旗が出ています。開場している曜日と時間は毎週木・金・土曜日の午前8時30分から午後4



時まで。広場に持ち込めるものは、陶磁器、ガラス食器、廃食油、紙容器、洗剤の計量スプーン、ペットボトル、ペットボトルのふた、食パンの袋の留め具、家庭金物(市の収集袋に入る大きさに限ります)。今回のポイント制度は、



来場1回につき1ポイント、5ポイントでリサイクルトイレットペーパー2個と交換です。

オープン当日から報道関係者や視察団も多数来場

7月24日のスタート初日、午前8時30分からささやかなオープニングセレモニーがおこなわれました。挨拶にたった石阪市長は、ごみゼロ市民会議の実験を引き継ぎ市の事業としてこの広場がスタートするにあたって、これまで実験にかかわったさまざまな関係者に感謝の意を述べました。また、初日には、雑誌や新聞など報道関係者が取材に訪れただけでなく、葉山町議会から14名の議員がバスで視察に訪れ、広場の様子を見学しました(編集担当 記)。

(画像左上:常設「リサイクル広場」前景、真ん中右:広場の中の様子、左下:挨拶をする石阪市長)

第60号目次

常設「リサイクル広場まちだ」がスタート	1
「ごみゼロ市民会議」その後の市民協働	渋谷 謙三 2
鶴川の古民家でリサイクル陶器の作品展が開催	井上 弘貴 5
町田市中期経営計画 重点政策「商業・文化芸術都市の創造」を考える:4	大橋 成夫 6
事務局だより・編集後記	8

■ようやく見えてきた「市民会議」以後の市民協働の動き

市民委員 134 名との、かなり先行きの読みにくい「協働の体験？」でもあった「ごみゼロ市民会議」が、1年有余の実験期間に区切りをつけて昨年11月17日に提言書を提出してから早や約8ヶ月が過ぎました。あの日、市民委員代表からの提言書を手にした石阪市長が、「これまでの活動を途切れさせずに継続してゆきたい」と力説していた姿が、私には今なお強く印象に残っていますが、その約束どおりに「実験」という言葉を取り去った「リサイクル広場まちだ」が装いも新たに、去る7月24日、リサイクル文化センター内の元剪定枝資源化センター跡地に正式にオープンしました。もっとも、この施設が市の設置条例による施設としてオープンしたものなのかどうかよく判りませんが、何の目的で、どのような役割を果たす機能として設けられたのか、また、この施設は市内でここひとつだけの計画なのか、実験期間中には他の地域にもという声が寄せられていましたが、それらの要望にどう応えていくつもりなのか、改めてきちんと市民に説明がなされ、今後この施設が市民との協働で全市的にどのように展開されようとしているのか、これからさらに分りやすく公表されることが望まれます。

この機会を利用して敢えて強調しておきますと、「実験・リサイクル広場まちだ」は、私たち市民の提言書の中で、現状は「リサイクル文化センター」と呼んでいても、実態は焼却施設そのものであるセンター自体を、「リサイクル広場まちだ」と名称変更し、以下のような機能を持つ施設に転換させることまで付言した画期的な内容の提案だからです。

提言3. 発想の転換で、資源化の新しい広場・しくみをつくる

○「実験・リサイクル広場まちだ」の機能を、以下の観点から強化し、実施に移す。

- ・ごみではなく資源として活かす広場
- ・持ち込み方式の中心拠点
- ・市民が目を見て、考える環境教育の場
- ・「ごみゼロ」を市民同士が話し合うコミュニケーションの場
- ・努力した市民が報われるポイントシステムの検証と還元窓口
- ・リサイクル公社、働けバンク、花の家、資源協同組合との協働

町田市に限らず、一般的に役所の仕事は「やるのが遅い」とか「詰めが甘い」などとよく言われます。「最初は市民の知恵を借りたのに、実施の段階になるともう市独りでやりたがる」と耳にしたり、「だから市民感覚が希薄で役所の都合に合わせた事業に変質してしまう」ことも実際に体験させられてきたところです。

これは『自分の商売事ではないから、成功も失敗もあまり関係ないし、少々遅れても大して支障はない』ということなのか、それとも『市民を入れると余計な仕事が増え、面倒になり勝ち』なのでなるべく敬遠するのか、いずれにせよ、少しでも良い成果を挙げようと望む市民たちとの協働作業は、市職員にとっても、口で言ったり頭で考えたりするほど簡単なことではありません。

しかし、それはそれとして、今回の「家庭生ごみ処理機の集合住宅と戸建て住宅への適応事業」と「リサイクル広場開店」の二つを、市民提言を受けた形で約8ヶ月で実験から実施へと漕ぎ着けたことは、これまでの町田市政の実像を熟知する私自身から見れば、かつて経験したことのない程の大きな前進であるとも言える出来事です。特に「リサイクル広場まちだ」のオープンまでの準備期間中は、ごみゼロ市民会議で熱心に参加した市民の関係者たちが、担当課職員と協働で立ち上げに苦労を重ねた末に出来上がったもので、これからの運営は市行政が主体となるにせよ、市民との協働に心して歩みさえすれば、より多くの市民から支持される施設として大きな成果が期待できると思っています。

■ 歩みを止めない行動する市民たち

一方、「ごみゼロ市民会議」が終了し、お役目御免となった市民委員の中に、熱心で勢いをとめずに、それぞれの活動を継続する「行動する市民」も大勢います。『誰に頼まれた訳でもなく、世のためひとのためと言うより、むしろ家族と自己充実のために、自ら信じる道をひたすら歩む自立する市民』と表現して良い人たちかも知れません。

お役所は『自らの行政遂行上の日程だけで市民を集め、都合の良い意見を程よく調理してまとめて見せ、後の市政展開には火のついた市民エネルギーはかえって迷惑な存在』というのが、従来までのごく常識的な「市民参加の定番コース」で、町田も前市長時代はお恥ずかしいながら、それが市政への『参加の定食メニュー』でした。だから、定められた参加の期間が終われば、それ以後も自ら行動し行政に協働を求める市民は皆無に近い状態でした。

しかし、今度はなぜか状況が変わりました。「ごみゼロ市民会議」の開始早々に、打ち出された市長のごみ処理に対する基本方針―「ごみになるものを作らない、ごみは燃やさない。埋め立てない」が、信頼への第一歩につながったとみる人もいます。また、多額の予算をためらわずに用意して、実際にみんなで確信のもてる方策を実証実験の中から見つけ出すという手法が、1年余りの活動の中で信頼されたとも考えられます。

いずれにせよ今は、石阪市長の閉幕での挨拶「市民会議でのこれまでの活動を途切れさせない」という言葉を素直に理解し、躊躇することなく行動する市民が次々に出現し、多彩な活動が生まれる様相を示し始めています。

それらの中から、私が知りうる「町田発・ゼロウェイスト宣言の会」の有志が活動を始めたいくつかの事例を、以下にご紹介しておきましょう。

④終了した「ごみゼロ市民会議」に替わって「ごみゼロのまち」を進める市民活動の中心となる核組織が必要と考え、NPO法人の設立準備を始め、今、認証申請中です。

⑤これまでの実験を市民サイドで更に拡充継続して、地域毎の「ごみゼロのまちモデル」を創造しようと考え、3月に「環境省の循環型社会づくり地域支援事業」に応募しました。(7月14日に不採用が決定し、とても残念です)

⑥2月から3月にかけて、(株)三和へ「レジ袋廃止実験」の実施要請を行い、その場で実施の快諾を得て、「三和スーパー・小山田店」での6ヶ月実験が開始され、それを支える市民の無償ボランティアの紙袋供給も始まり、町田市におけるこの市民、行政、企業との初めての三者協働は全国初の画期的な運動として、多くのマスコミを賑やかすことになりました。現在、この実験を本格的実施につなげるためのレジ袋代替新システムの研究に三者で取り組み、近く新しい実験を試みる予定です。

⑦4月5、6日の2日間、恒例の市内尾根緑道でのさくら祭り会場に、初めて市民提案の「祭りごみ」を分別・資源化する「エコステーション」6ヶ所の協働開設に成功しました。紙コップ、白色トレイ、割り箸、ペットボトル、缶・ビンなど2日間で2トン弱の資源物をごみにすることをストップしました。(昨年は3.5トンすべてがごみ処理された実態があり、このステーション実験は関係者から高い評価を受け、今年度のこれからの公的な祭りー市のごみフェスタや緑と太陽の農業祭などに協力要請を受けている)

このほか「宣言の会」以外の市民団体(EM 窪平)でも、家庭生ごみ堆肥化の自主的な研修会を9月に開催して、市の「家庭生ごみ全量資源化」という中期計画事業の推進を市民サイドから応援する企画も計画されています。

また、このような市民の人たちの行動とは異なりますが、注目すべき現象として、町田市のこれまでの活動そのものを評価する現象が、全国の各地に広がりつつあることです。そのひとつは外部から町田市への視察者の増加で、代表的な事例を挙げますと、去る7月18日の沼津市議、7月24日の葉山町議の視察などです。リサイクル文化センターでのヒヤリングとリサイクル広場の視察、三和・小山田店でのレジ袋ゼロ実験や小山田桜台団地での集合住宅用の生ごみ電動処理機の設置現場視察などが相次いでいるのです。そしてもうひとつは、石阪市長を始め市民会議関係市民への外部からの講演依頼です。一例を挙げて、本レポートの締めくくりといたします。

●2008・生ごみリサイクル交流会・「生ごみは宝だ」―― 市長講演を聴いてみよう

「41万人都市 町田市民の挑戦！市民協働のごみゼロのまち」

―― 家庭生ごみの全量再資源化へ ―

基調講演： 町田市長 石阪 丈一氏 参加方法問い合わせ・渋谷まで
8月26日(火) 午前10時 早稲田大学国際会議場 042-721-5656

鶴川の古民家でリサイクル陶器の作品展が開催

井上 弘貴

小田急線で町田駅から新宿方面に向かっていくと、鶴川～柿生の付近でかやぶき屋根の古い民家がほんの一瞬ですが車窓に入ってきます。周囲を新興住宅地に囲まれてしまい、急行や快速急行に乗っていると、そのたたずまいに気がつかないことも多いのですが、鶴川には武相荘だけでなく線路沿いにも古民家がひっそりと残されています。

鶴川で「温故知新の家づくり」をおこなっている鈴木工務店(鈴木工務店ホームページ



<http://www.suzuki-koumuten.co.jp/index.htm>)の敷地にあるこの古民家、可喜庵(かきあん、左の写真はその前景)で、7月18日(金)から21日(祝月)のあいだ、「安諸一郎・小木曾教彦 展 2008—土に還る」が開催されました。

安諸氏は、鶴川の大蔵で「陶芸アトリエ」を主宰し、岐阜県でリサイクル陶器の研究と普及を進めている「グリーンライフ21」とも連携をとりながら、やきものリサイ

クル活動と作品づくりをしている地元の陶芸家です。ごみゼロ市民会議での「リサイクル広場まちだ」の実験でも、陶器のリサイクルについて折にふれて助言をしてくださった方です。小木曾氏は、岐阜県が多治見市を拠点に、日本だけでなくアジア各国でも活動している方です。

筆者が訪れたのは21日の最終日でしたが、落ち着いた室内の棚や畳におふたりの作品が展示されているだけでなく、居間のテーブルで作品の茶碗にお茶を注いだり、お皿に食べ物を盛



ったりと、皆で陶器を実際に使いながら、作家と訪問者とが気持ちの赴くままに歓談を楽しんでいました(左の画像は訪れた人たちと語らう小木曾教彦氏)。その光景はまるで芸術家たちが集うサロンのように感じられました。まさに鶴川の隠れ家のような可喜庵です。

この可喜庵では、今回の作品展以外にも、つねにさまざまな企画が催されています。8月21日(木)から9月16日(火)には、宮脇壇没後10年を記念する「デザインサーヴェイ図面展」が開催されるそうです。8月23日(土)にはギャラリートークも企画されています。この企画展のチラシやハガキをご希望の方は鈴木工務店の畑典子様まで(kakian@suzuki-koumuten.co.jp)。

※ 可喜庵での催し物等については「つれづれ可喜庵」というブログ(<http://kakian.exblog.jp/>)でも知ることができます。可喜庵のホームページにもそこからリンクしています。



美術館・博物館の“鑑賞教育”の必要性が高まっている

美術館・博物館で鑑賞教育の必要性が高まっている。2006年8月、東京国立近代美術館で「美術館を活用した鑑賞教育の充実のための指導者研修」が開催され、全国の小中学校教員と指導主事や、美術館学芸員を対象にしたこの研修会に131人が集った。もともと、以前から鑑賞教育は、創造教育と並んで学習指導要領にもその重要性は明記されていた。しかしあまり横の連携(美術館と学校)は、かならずしもよくなかった。ここにきて国内の公立美術館は、子どもや小中高生対象のワークショップのプログラムづくりに熱心である。特に美術館・博物館は、子どもにとっては未知なるドキドキの場所である。楽しい体験や将来につながる創造性を育む最適な場所である。美術館と学校の連携を密にする方法を早く構築するべきだ。

金沢21世紀美術館の成功の一つに、名誉館長である秦豊氏はキーワードとして「子ども」を挙げ、『私は、ここを子どもに感動を与える美術館にし、美術を通して子どもたちの創造力を高め、心を豊かにしたいと考えていた』と述べている。開館の1年、金沢市内の小中学生4万人をバスで迎えに行き、数人ずつのグループに分け、ボランティアガイドをつけ鑑賞させたのである。そして日本唯一の「にぎやかな美術館」になったそうだ。観客動員からみても「子ども」を招待したことが波及効果を生み、親や兄弟が来館する機会ができたことで来館者増にもなったのである。それには子どもが嬉しくなるような仕掛けが沢山考えられたのである。例えば、招待で来た子どもたちにも一人ひとりチケット(入場券)を渡したことである。団体でありながら大人並みのチケットが貰えたことは、子どもにとっては嬉しくないはずはない。その上、“もう1回券”を渡して次回は親との来館をうながしたのである。

先日、大阪の国立国際美術館に「モディリアーニ展」を観に行ったところ、こども手帳『モディリアーニのとき』と題した、A5版(カラー36ページ)の小冊子があった(写真1)。モディリアーニがパリへ出てきて、成功する過程を作品や当時の友人の画家や詩人達との交友を紹介しながら、19世紀から20世紀へかけての簡単な美術史も分かるように編集されているのである。同時開催の現代美術家の「塩田千春展」も、子ども向けの小さなリーフレット(11cm角・A4版三つ折り)を配布していた。現代美術を、子どもたちに積極的に鑑賞させる試みをしているのである。

滋賀県立近代美術館は、数年前から学校貸出し用美術鑑賞教材「アートゲーム・ボックス」を作成し学校へ貸出して、楽しくゲーム感覚で美術に触れる機会を増やしている。

東京都現代美術館もまた、スクールプログラムの中に「鑑賞キット(スライドキット・ビデオ)」をつくり、一人でも多くの小中高生に現代美術に触れて親しんで貰うために貸出しを行っている。「ミュージアムスクール(体験型の常設展示室作品解説)」では、小中高生の学校向けのプログラムも実施している。学芸員とともに常設展示室をめぐり、みんなで体験し対話しながら楽しく作品鑑賞している。

世田谷美術館もボランティアガイドを育成して、子どもや小学生対象に作品の解説を行っているし、子ども向けイベントも常時行なっている。

横須賀美術館(2007年4月開館)では、所蔵作品を展示して小学生対象に美術入門「あそびじゅつくる展」を7月21日まで開催していた。プログラムはいくつかあって、親子で楽しめるものもあった。その中の一つを紹介すると『コレクションをつくろう』では、発泡スチールの大きなステージ(約5メートルの円で高さは大人の腰ぐらい)の上に、会場で見つけたお気に入

りの所蔵作品のハガキ大の絵を、自分で自由に切り抜いて立てて「コレクション・タウン」をつくっていた。ちょっと想像できないでしょうが、素晴らしい眺めである。所蔵作品もこうして角度を変えて見せることで、参加性も関心も高まるだろう(写真2)。

このように公立美術館・博物館は、地域で「愛され、生き残っていく」ためには地域貢献力を高めることが必要になってきた。競争相手として、芸術系大学も積極的に地域貢献を考えたアートイベントを行ってきている。

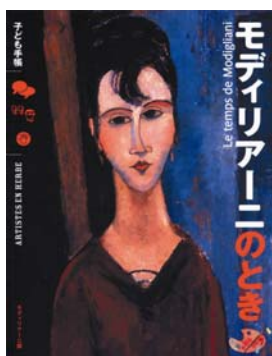
多摩美術大学では、この秋、上野毛と八王子両キャンパスで三つのプログラムを展開する。その一つ「あそびじゅつ」では、小学生対象に「木片をあつめて、好きなものをつくろう」「アクションペインティング」など5つの講座を海老塚耕一教授の指導で開講する。実はこの教授は、今年5月18日の日曜日、市政50周年記念大学連携事業の一つとして、町田第一小学校体育館で「自分を描こう！なに描こう！」を開講した。63名の小学低学年生が参加して、午前10時から昼食を挟んで午後3時まで、長時間熱心にワイワイと楽しく行われたのである。教授は、10年前から各地の小学校へ出前授業を行い、約40のプログラムがあるそうだ。この日は、二人一組になり段ボール紙にお互いを型取りして、自分の等身大の人型を絵の具と端切れを貼ったりしてつくったのである。教授は『完成度を求めるのではなく、仲間と一緒に作る過程が大切である』と言われた。このワークショップには、残念ながら当市の学芸員・教員は一人も参加していなかった(写真3)。

美術館の機能は、収集、調査・研究、企画展示、教育・普及の四つと言われているが、日本の美術館では“教育”という認識がでてきたのは、戦後のことである。ただし“教育”とは、英語で“エデュケーション”で“引き出す”という意味で、『美術館では、本来答えを導き出すまでのプロセスが大切』と、前出の養氏は語っている。

欧米に比べて日本の美術館は、“教育・普及”担当の学芸員が少ないし、むしろ企画展示担当の学芸員の方が圧倒的に多い。鑑賞教育のプログラムも各美術館の試行錯誤段階で、まだ確立されていないし、現場ではいろんな課題が出てきているようだ。

いずれにしても美術館と学校の連携は、地域社会や行政の力を借りないとできないことだ。現状、美術館・博物館を取り巻く環境は、財政もしかり非常に厳しいことを、市民も行政関係者・学芸員も認識することである。自分たちの美術館・博物館であることを前提に。

我が街の美術館・博物館は、どうあるべきかを一度真剣に考えていただきたい。(つづく)



(1)子ども手帳 (2)「あそびじゅつくる展」チラシ (3)大学生に優しく教えられて人型を描く

※ 参考・転載文献：「超・美術館革命」秦 豊著 角川書店発行/「日経 五つ星の美術館」日本経済新聞社編 町田市立国際版画美術館友の会会報「Han版Fan」第30号

事務局だより

- 次回定例会のおしらせ
9月の定例会は9月3日(水曜日)です。
中央公民館 学習室(3) 18:00～

お願い(再掲)

今年度の会費が未納の方は、下記の口座にお振込みをお願いします。

口座:「ゆうちょ銀行」 10160 - 67915431

名義: 町田まちづくり市民会議

生ごみリサイクル交流会で石阪市長が基調講演

今年で16回目を迎える生ごみリサイクル交流会2008(主催: NPO 法人有機農産物普及・堆肥化推進協会)。本年は8月26日(火)午前9時30分より、早稲田大学の国際会議場(早稲田キャンパスの中央図書館に併設)にておこなわれます。

本年も早稲田大学政治経済学術院(政治経済学部)の寄本勝美教授の歓迎挨拶を皮切りに、午前中には基調講演としての事例発表が二つおこなわれる予定です。その一つとして、町田市の石阪丈一市長が「41万人都市 町田市民の挑戦! 市民協働のごみゼロのまち…家庭生ごみの全量再資源化へ」と題して講演をおこないます。参加方法につきましては本紙4ページをご覧ください。



また、お昼をはさんで午後(14:00～16:50)からは、渋谷謙三氏(環境自治システム研究所 所長)がコーディネーターを務める「バイオマスタウン構想の街づくりが進む」の分科会をはじめ、四つの分科会にわかれて全国各地のさまざまな事例発表が報告されます。

編集後記

6月17日(火)から7月6日(日)まで、町田市民文学館 ことばらんどで、1974年から34年にわたって町田の駅前を撮り続けている新倉孝雄(にいくら たかお)氏の写真展「まちだ Wonderful Street」が開かれていました。



「23万人の個展」があった年に都南産婦人科で生まれた自分としては、モノクロの写真の数々を観ながら新しい発見をしたり、小さい頃を思い出したりと、とても身近な写真展でした。

今回、この写真展の企画をしたのは“ドリーム10”の会(会長 武藤充)さんです。みんなで夢をひとり10個くらいは持とうよということで誕生した会だそうで、会員は20名ほど。会の外に向かったの企画は今回が初とのことで今後の活動がとても楽しみなまちづくりのグループです(H.I.)。

まちづくりの環

町田まちづくり市民会議会報
2008年8月1日第60号発行
発行者 佐藤東洋士
編集責任者 井上弘貴
事務局 常盤町桜美林大学内
Tel 042-797-6947